

道行くアノコは死神

ねえなんで私が私が解る？

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

町を歩いてるとすれ違う人っているよね。
実はあれって死神なんですよ。

目次

道行くアノコは死神

まただ。今、本当に危なかった。
僕は常に死神に命を狙われている。

発端はたしか、小学生の頃だ。
遊具で頭を打った時から、僕は死神が見えるようになった。
その日から僕の日常生活は一変した。

この世に存在するありとあらゆる死神が、僕の命を狙ってくるようになった。

例えば、算数の授業中。

隣の席に座った死神が、ノートを貸してくれ、と言ってきた。当然断った。

もし死神に文字でも書かれようものなら、見ただけで僕は死んでしまう。

例えば、体育の授業中。

僕は常に端っこにいて、死神と関わらないようにした。

だが、奴らは僕を殺そうと声をかけてくる。

「お腹が痛いのか？大丈夫？」

なんて恐ろしい奴だろう。親切なふりをして、僕を殺そうとしているんだ。

「おい、お前もやれよ」

こんな脅しもあった。強制的に参加させ、殺そうとしたのだ。これには圧倒的な恐怖を覚えた。

中学校に進んだら、死神から声をかけられる事は少なくなった。
そのかわり、わざわざ僕の目につく場所で作戦を練るようになった。ちらちらと此方に視線を送り、また輪を作ってぼそぼそと会議する。

……
ああ……この時に心に負った傷は、未だまったく癒えていな

い。それどころか、ますます僕の精神を弱らせる。

目標の目の前で、どうやって殺そうか、どうやって苦しめようかと懇々に話し合っているのだ。

まだ幼かった僕の心に、あまりに深い傷を作ったのは、これに他ならない。

高等学校には進まなかった。当たり前だ。

中学校よりも、更に僕の命を狙う死神の数が増えるのだから。だが、部屋にずっと落ち着いて居られるという事は無かった。

「ねえ、偶には外に出て！」

扉を叩く激しい音。そして、僕を呼びつける大きな声。

たまらなく恐ろしい。布団にくるまっても尚、体が震え続ける。ガチャガチャと音を立て、鍵を抉じ開けようとする。

止めてくれ。止めてくれ。

だが、口に出せばお終いだ。死神と言葉を交わせば、死んでしまう。

「駄目です、先生。まったく開けてくれません」

「ふむ…」

女性の心底残念そうな声に、顎に手を当て思考を巡らす白衣の男。

この白衣の男は、俗に言う精神科医である。

「…いつ頃からですか？」

「確かもう…十年ほど前から」

はあ、と溜め息を吐くと同時に答える女性。肩を落とし、項垂れて
いる。

その言葉に、男が反応した。

「十年ですか。それはまた」

「キツイ話です。仕事があるというのに…」

「その通り。しかし、あと一步の所までは到達していますから」

男なりに女性を励まそうとして言った言葉だったが、とくに女性は
気づかなかったようだ。

「先生、私はこの子で三人目です」

「…三人目」

「たった二人だけ、という訳です。私が焦る理由がお解りに？」

「…よく理解致しました。及ばずながら力になりましょう」

「助かります」

踵を返して帰っていく白衣の男。

その背中を見て女性は、

「ふん、何が理解できませんでした、だか」

そしてもう一度扉に目をやった。

「あんたでやっとな三人目。私の命も危ないな」

女性はノルマを達成する事だけで頭を満たしていた。